

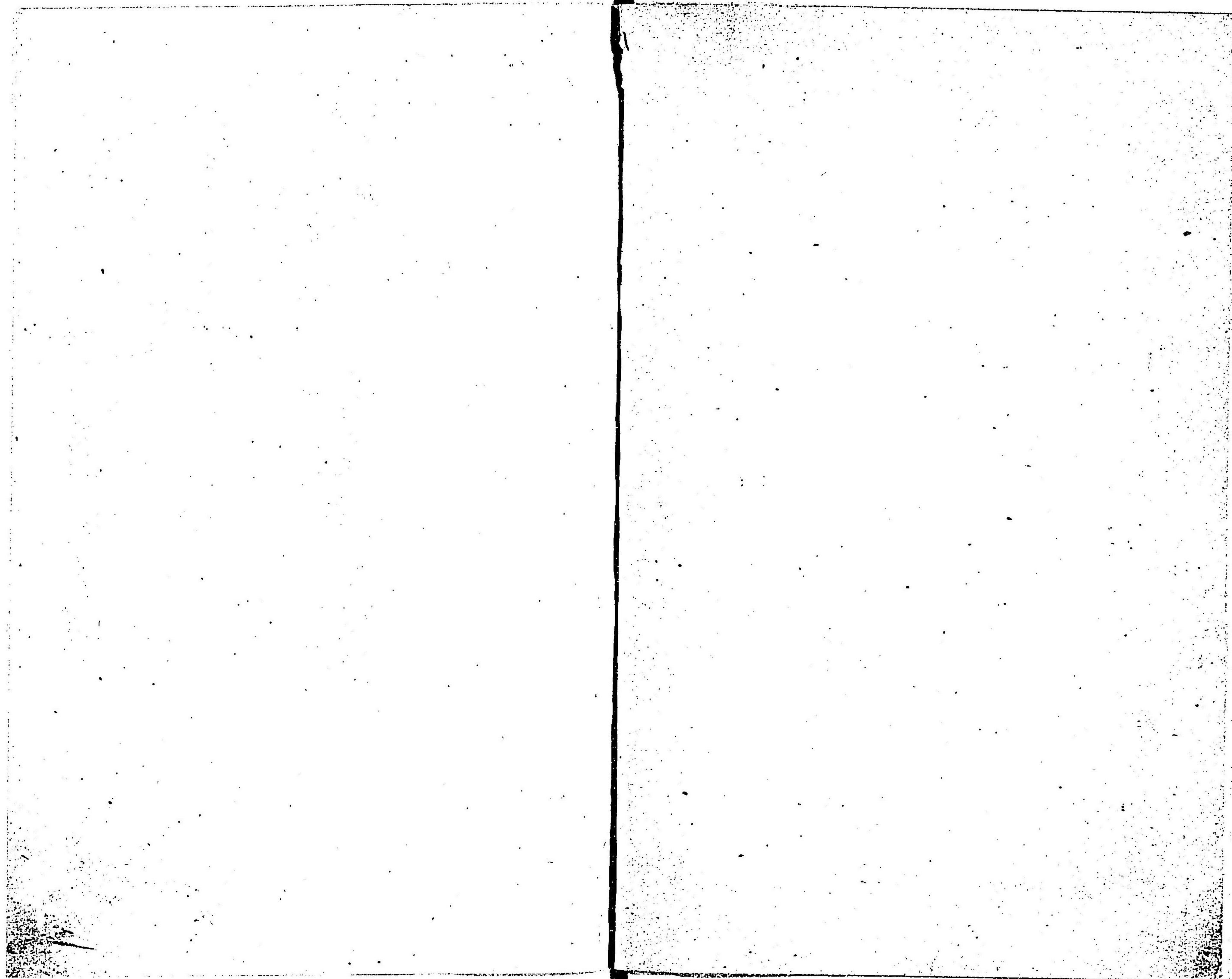
K-65

書

佐藤麟角居士著

救世百年眼

東京 湖源教會藏版



特49

827

No. 11773



高津 鳥尾 前島
密 得 卷 樹

島地 默雷
高橋 泥舟
中村 正直

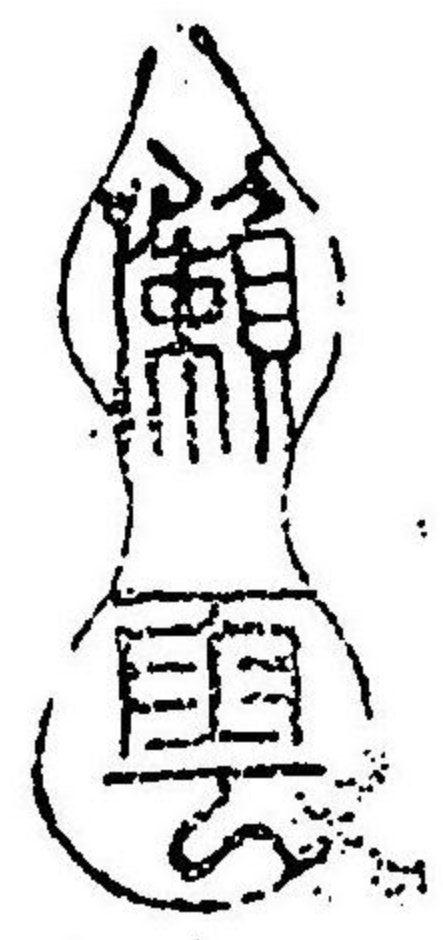
諸大家序跋論評

救世百年眼

佐藤麟角居士著



張



15



元

氣

面

氣

口淨春風
心法不二



救世百年眼序
釋迦如也。彌勒如也。伯夷如也。盜跖如也。老莊
孔孟。耶和華。基督。事々物々。法々塵々。一如而
無二如也。盡古盡今。盡天盡地。何物不真如。何
事不法身哉。是根本智之所照也。是真諦智之
所照也。是如理智之所照也。若就其俗諦論之。
則迷悟染淨。凡聖內外。邪正真贗。并々區別。毫
不可誣也。是後得智之所照也。是俗諦智之所
照也。是如量智之所照也。故提其平等。煩惱即
菩提也。生死即涅槃也。若提差別。煩惱則煩惱。

而非菩提也。菩提則菩提。而非煩惱也。隨順法本。是謂正。違逆實際。是謂邪。冠屨豈得錯置哉。故學佛之徒。邪正真贗。雙照雙亡。亡故不辨。照故常辨。脫却邪正。優入天真。可以始談佛教之事也。有麟角佐藤君。著救世百年眼。山本提山君。來而乞序。乃見之。議論雋拔。筆々斬新。足警醒一世焉。其癡疵耶蘇者。似余所謂差別門。其愛護耶蘇者。似余所謂平等門。大本既明。則救業何論。至黃人不能守吾教。而白人代而領之之事。則大日本數千萬人之所未曾道及也。其

忠責我黨。與大聖世尊之說法滅盡經一般手段。蓋說法滅。要其不滅也。說黃人自滅。乃要黃人自奮也。讀者莫誤爲吳子胥東門之眼矣。乃序。

明治二十年七月二十三日
記於東京富母樓

蓮船 小栗栖香頂

救世百年眼序

敬字中村先生評曰。萬物皆備於我。通篇所悟
 入全在茲。昔哉言也。然以余觀。則物外不知更
 有我者。又不知悟者所在也。况其名相之有無。
 向背俯仰。彼此能所乎。於是。我即物。物即我。亦
 得矣。我無非我。物無非物。亦得矣。每我每物。回
 互無盡。亦復得矣。著者麟角佐藤君。余知己也。
 能觀余所觀。能言余所欲言矣。痛快痛快。余端
 證將眼中眼。救世於去來今已。先生之眼。蓋固
 在于此矣。 明治廿一年七月 森々柏樹子

救世百年眼緒言

余往時伊達自得翁に就て佛理の蘊奥を承る
 を得たり。日翁余を戒めて曰く。今より後急
 劇事に就くなかれ。存養省察以て他日を俟つ
 べし。と余等敢て當らんや。唯るの知己の言を
 回照すれば。背汗も亦啻ならざるなり。亦嘗て
 敬字先生に隨て西學の源を受るに及んで屠
 裡便々として樂地あるを覺ゆ。今や世上を通
 觀するに佛那錯然。人その指針に迷ふ。され筆
 鋒を發揮して學教の源を叩くの時ならん然

れども余や商事多忙筆硯に親近するの暇なし偶ま微恙家に在り論を裁するはと左の如し題して百年眼と云唯恨む参考の書冊なく簿記牙籌の座右に散亂するあるのみ他日幸に閑暇と得ば將にその缺を補はんと欲するなり或は曰百年眼の言妄よ過ぐるなきか先輩の瞋を恐れむやと實に然り然れども余知己を百歳の後に俟つものなり

明治廿一年七月

著者識す

救世百年眼

世の懸隔を問はむ人の賢愚を論ぜむ苟も兩間に生存せる人種は黃白如何の區域に論なく各の所信の宗教なかるべからず而してこの世界の廣き經論の多き何人か善くその眞理を説破して安心自立の教道を建立せるや支那の老莊は淡泊虛玄を説てその説を擴張せれども未だ教主の目を付むべからず孔孟は忠信仁義を説て善く人を教ゆれども未だ教主の目を付すべからず諸子百家の流に追んで仁義の言滋す

顯はれ博愛を以て仁となし篤行を以て義と釋せり然れども皆未だ教主の目を付すべからむ猶太の耶蘇は自ら神子と號し自ら救世主と唱へ末世の民に代てその罪を償ふと稱し上帝の民を愛するは春日の萬物を發育するが如し我の人を愛するは上帝の我を愛するが如しと謂ひ天地日月も上帝の造作するともろ父母國土も上帝の造作するともろと謂ひ其敬愛の道を説くまど厚しと謂ふべし然れども人間の生存する所以の理に於て事物と眞理とを究極し安

心の教を存するとなしまゝ本然の理教を談するの語ありと雖ども學者をして切瑳せしむるの要義とする能はむ故に耶蘇基督を以て世教の本主と爲すに足るも未だ出世教の本主として教主の目と付すべからむ若夫れ敬愛仁義を以て世の教主とせるかその救主も亦多し衣は寒暑を防き食は饑渴を養ふ故に衣食の急なる敬愛仁義の後ならんや由是言之衣食も亦これ救主ならん醫は病を知り藥は病を治し醫藥の功は敬愛仁義の上に出づ故

島地黙雷
日現今印
度婆羅門
新教之說
暗合此意

に醫藥も亦救主ならん如此なれば牛、馮、馬、渤も亦これ救主と謂はざらんや、夫然り豈夫れ然らんや蓋し世の救主とは人間心病の所在を知り三才の道を竭し實義の教を存し普く世人をして信を置に足らしむるの理由あるを以ての故なり

試みに耶蘇が所立に就てうの一二を論ぜん靈魂不死を言が如き殆んど精妙に似たりと雖ども真理の本分よりして之を論ずれば未だ瘁を

搔くの言語と云べからず何とならば靈魂を以て一礫物の如しとして不死と謂はゞ如何なる地を以て所住とするや如何なる形相をなして生死往來もるやうれ死は生に對するの辭にして死なくんば生も亦なけん生もなくなんば焉ぞうれ死あらんや何爲ぞ靈魂は如々なりと謂はざる何爲ぞ靈魂はうの生なくうの滅なくうの増なくその滅なしと説かざるや而して靈魂身體共に天帝の授與なりとして言路を絶するに至つては豈うの言の撞著するのみならんや

學者をして終に迷悟兩般を決せしむるに由なきなり
 三位一體の説の如き耶蘇にして始て得べし後世の人をしてこの地位に至らしむるに於ては或はその補助の言語を假らざるを得ず何となれば上帝を以て物とあし靈魂を以て物となさばその道や支節分離の道にして終に打成一片の時あるべからず豈同體一體の眞理に契當すべけんや故に境相の上よりして立言すれば上帝無形なりと雖とも然れども善く萬物化育の

政令を行し感應道交をなすと云へり靈魂無相なりと雖ども然れども善く視聽言動の境をなし心意識情の相をなすと謂はざるべからず而してその境相の實を求むるに終に得べあらざるなり譬へは月の水上に印をるが如し水の月の月共けろの實體なきが如し乃ちされ上帝や靈魂や無なるが如くにして有なり有なるが如くにして無なり而してその眞有なるもの有るとなし則指示して三位となし一如となすも亦妨げざるなり是れされを眞空といひ眞有とい

ふ此の如く説かば實理に契當して大過なきのみならず學者をして氷然として疑團を破るに足れり然らずして三位は一體靈魂は不死のみ言説せば唯實理の邊際に轉迷せしむるの語となるのみならず靈魂身體の畛界を存立せざるを得ざるなり然らば則ち基督教の金科玉條とせるは真理の語言に非らずしてたゞ一の愛字あるのみたゞ一の信字あるのみ將來傳道に與るもの真理の本源を究極し教主未發の經義を發見しうの所説を擴充せばその功豈に

禹の下にあらんや

抑も今日歐米諸邦典章文物みな宗教に淵源すと爲せり顧ふにそれ宗教やは人心を快樂よし胸懷を開豁ならしめ形以上の實理を支配せるの徳あるが故に教の善否に論なく言の高卑に係はらず心をして萬機に通むるの自在力を得せしむるが故ならん然れば則ち宗教の善美なるものはまほしく家國をして福利を得せしめ人民をして安樂を享けしむると豈その辨を俟んや

中村敬宇
曰確言

ふ此の如く説かば實理に契當して大過なきのみならず學者をして氷然として疑團を破るに足れり然らずして三位は一體靈魂は不死のみ言説せば唯實理の邊際に轉迷せしむるの語となるのみならず靈魂身體の畛界を存立せざるを得ざるなり然らば則ち基督教の金科玉條とせるは真理の語言に非らずしてたゞ一の愛字あるのみたゞ一の信字あるのみ將來傳道に與るもの真理の本源を究極し教主未發の經義を發見しうの所説を擴充せばその功豈に

禹の下にあらんや

抑も今日歐米諸邦典章文物みな宗教に淵源すと爲せり顧ふにそれ宗教やは人心を快樂よし胸懷を開豁ならしめ形以上の實理を支配せるの徳あるが故に教の善否に論なく言の高卑に係はらず心をして萬機に通むるの自在力を得せしむるが故ならん然れば則ち宗教の善美なるものはまほしく家國をして福利を得せしめ人民をして安樂を享けしむると豈その辨を俟んや

中村敬宇
曰確言

往古來今聖經賢傳の上に就き東西の邦土に於て救主たるべきものを見るに印度の釋迦文獨り人間の苦惱を悟りたるの所説誠に全世界の救主と仰き美を千萬古に縦に垂るものありたるの所説に就て之を質せば十二因縁は以て次第生起の理を明し三世は以て生死流轉の理を示し四大は以て天地萬物の原素を總攝し四生は以て一切群靈の數を擧ぐ心識を渙發せるに至ては五蘊皆空と説き八識流轉と談ずるの精微に至ては豈筆舌の能く及ぶ所ならんや而して

懸雷曰該
羅無餘

て父母報恩經には孝を説き涅槃には愛を説く孝愛慈悲佛亦最も主唱せり然り而して教に大小乗の區別あり頓漸顯密の差排あり華嚴阿含方等般若法華涅槃楞嚴金剛の諸經は皆その眞理を發揚し高尚の道理を證せしむる大乘の法典ならざるはなし其他大小乗經の如き汗牛充棟大數壹萬餘巻と云説法四十九年戒に五戒あり十善戒あり二百五十戒ありその世教に關するもの亦多し地獄天堂の説因果實相の論みな以て人を以て勸善懲惡ならしむるに足れり

ろれ佛は一世の救主のみならず天人の師とす
 るも敢てその不可を見ざるなり往昔佛教の東
 漸して支那に傳はるに及んでは強弩の發未だ
 弛へず有力者輩出し各その經義を主として宗
 旨を分列す日本に再漸するに及んでは聖を去
 ると愈遠く宗義宗派の多端は以て亾羊の憾と
 なれりこれ殆んど強弩の末魯縞を穿つと能は
 ざると一般なり
 ろれ現今の佛教をして漸次改進の途に就かし
 め四分五列の跡を斂めてろの財政の源を遂ふ

し眞俗二諦に於て超脱自在を得せしめば大乘
 の眞理を弘通する何ぞ其難きを見んやもし謂
 とある信愛兩字の糟粕を認めて救世の宗教斯
 に盡るとせば伏羲の八卦周孔の易傳は實に救
 世の良書にして今世の宗教に超駕すると萬々
 ならん而して易の一書を以て宗教に列せざるを
 聞ざるなり余以爲く易の一書を以て修身正意
 の教となし經濟政事の翼となすも不可なから
 ん何となれば孔子十翼に於て開物成務の四字
 を書し吉凶存亾坐而知之と曰玉へり轉じてそ

の義の深密なるに迫るでは原始反終故知死生之説といひ精氣爲物游魂爲變是故知鬼神之情狀といひ樂天知命故不憂安土敦乎仁故能愛と云の類みな救世の言に非ざるなし而して猶未た宗教の一部に興からむ豈に愛を説き神を散せるのみならんや幽遠精微實理自然の妙味を存し感應道交の奇特ある決して架空の説と謂ふべからず

今それ耶蘇はその教義の薄弱なる易の一書に及ばむその眞諦の不完なる佛の小乘經にも齒

すべからず而して歐洲諸邦藉て以て救世の教となす抑も亦うの因るところ有るかさきの所謂三位や靈魂や耶蘇善くうの蘊を漏すも後世所傳その要を得ざるに由るか將傳道者の眼孔小にして未だその奥を窺がはざるか復た深く思を存せざるべからざるなり

今や耶蘇教の藩圍全地球を一匝し十字軍の氣炎天地を衝突も佛教はたゞ亞細亞の一隅に孤立し婆羅門波斯の諸教に伍せるが如きも千百年の後その果して歐洲大陸に西漸し佛耶地を

換へて運動せるとなきを知らんやうの果して
 眞理の源は佛耶名字のためは顯現せる能はざ
 るなきを保せんや然らずんばたゞ今日流通宗
 教の現状を認めて教義の善否を商量するに過
 ざるなり成敗を以て人を論じその法理を議さ
 ば世間の業も之を快とせず豈況んや出世間業
 をや且つ言を食むもの曰く耶蘇宗教の國はそ
 の土地必ぞ昌盛にその人民必ぞ活潑に文華駁
 々として底止せるを知らざれば佛敎の土地は國貧
 く兵弱く智識尙且つ上進せず未開蠻野に遠き

と幾許もなきとは是れ通じて今日の議論口實と
 なれり然れども若し如此皮想の言を設けて宗
 教を論斷せば佛耶共にうの弊跡なきに非ず故
 に余はこれを政事の良否に根せる者とせると
 當然の議論と思へり譬は我日本の人種を見よ
 七百年前覇府の興起せざる時代には人の軀幹
 偉大のもの多く七百年後覇府の威權甚だ強く
 束縛の制度大に行はれしより人心戦競うの
 結果竟し軀幹をして矮少ならしめ智識をして
 淺狹ならしむるに至れり苛政虎よりも烈しの

言以て思ひ見るべし又家庭の嚴正に過るもの
を見せやその兒子果して身體智識完全の域に
進まざるか如しされその政事の良否はその國
の貧富を區別すべくその人民の智愚を分つべ
し決じて咎を宗教のみに歸すべからむ
うれ宗教の宗教たる所以はその神の神たる所
以の理を悟り迷倒の見を脱するを以て極所と
なすなり彼の釋迦文はたとひの眞理を辨別し
て人を教導するのみならずその教中の文字に
於てはヒロソヒー（理學）の如きあり首楞嚴是な

リロヂック（論理法）の如きあり因明俱舍唯識是な
り政事經濟と論ずるものあり仁王經の如き是
なり律法の原を論ずるものあり梵網經の如き
是なり哲學の最上級を論ずるに似たるは金剛
經の如きあり或は詩句の高妙なるものは香風
吹菱華更雨新好者（法華經化）の如き人者樂苦之
始（阿含經）の類の如き實は妙絶文字にして杜子
美も三舍を避くべし數理を論ずるものに至つ
てはうの語句極て多し後々五百歳の豫言の如
き亦うの一なり而してその説法の善巧方便な

る善く人の根機に相應じ精粗至らざる所なし
 佛を稱じて世尊と謂ひ其辨を尊て廣長舌と謂
 ふ實に誣言に非るありろの支流の八宗となり
 十宗となる教元の廣大なるを表するに足れり
 それ偏小の假山は石花草木を排列すれども眞
 の風趣に乏し深山幽谷嶮崖絶壁の地に遊ばど
 溪泉の潔冽たる喬木の翳鬱たる紫蘭の郁々た
 る或は鼻を衝き目に上り身心快適瀟洒たるも
 の多し眞理の源に游泳せるもの亦たどあれど
 異ならず法見を存し非法見を存せば未だ假山

一敬字日妙
 妙妙

一黙雷日好
 譬喻

のその趣味を盡さざるが如く世間を破し出世
 間を存せざるは泰山に登て天下を小にし清風
 弄月の樂み陶然たるものあるか如し
 見よ草根木皮は均しく是れ草根木皮なり良醫
 されを用ゆれば病を治し阿片蒙爾比根は均し
 くされ阿片蒙爾比根なり庸醫されを用ゆれば
 人を誤る今日泰西の耶蘇教は良醫の草根木皮
 を用ゆるが如く亞細亞の佛教は庸醫の阿片蒙
 爾比根を使ふに異ならずたと用ひて人を誤
 るのみならず併て亦自家を救濟する能はずあ

何そ其懸隔の甚だしきや然りと雖も若し今日
 の哲學をして他日その奥に登らしめば必ず
 佛智を發見せるならん今日の耶蘇教蔓延は他
 日或は佛種を傳播するの良田地たるなきか余
 之れを孔子に聞く齊一變すれば魯に至り魯一
 變すれば道に至ると今日の哲學はこれを齊に
 譬ふべく今日の耶蘇教はこれを魯に比すべし
 齊魯一變して道に至るはそれ佛か然れば則ち
 佛耶の徒豈その軒輊をするに足らんや
 それ佛と謂ひ耶と謂ふ同じくあれ天地間の善

術なり同じくあれ千百年の教迹なり遷動して
 止ざれば皆その堂に登るべし願ふに歐米諸洲
 國廣く人多し大人君子なくんばあらず他日神
 光の赫爍たる佛智の圓滿なる或はその淵藪と
 なるも計るべからず今より後余たゞ期す智徳
 上進し百物利通し萬國共にその福利を享有し
 佛耶の名字を一掃し眞理をして豁然貫通とる
 の域に達せんとを刮目して以てあれを俟つあ
 るのみ

救世百年眼補遺

余この論を印行せむに臨んで深く自ら戒慎し
讀者の注意を促さざるを得ず何となれば世人
余が此の論を讀んでその理致の淵底を窺ふの
暇なく忽ち無神論に陥らんとせむと是なり
夫れ佛の慈悲孔子の仁耶蘇の愛共にうの揆を
同じふせり耶蘇の獨一神孔子の天佛の眞如を
の説くとある異なりと雖ども淵源に遡れば同
くある一道理なりと言はざるを得ず然れども耶
は譬ば門外よりその庭園の排置と家屋の結構

とを概見して主公の面目を指摘するが如く靴
 を隔てゝ痒を搔くの憾を免かれず故に世人を
 して動もすれば妄信の念を起さしむ孔は主公
 に面接し親しく言語を交へその賢愚を見たる
 が如きも惜いかな接對の狀券と登階の路程と
 を指示せざるものゝ如したゞ佛のみ主公に握
 手し欣抃笑語主となり伴となり珍膳美肴一と
 して具備せざるなし豈その接對の狀券を握り
 登階の路程を指示するのみならんや庭園の接
 置樓殿の構造歴々としてその眞景を顯はさど

るはなしあれ余か佛を以て獨出の教主と尊崇
 もる所以なり然れども今日世態の上に就て佛
 耶の二教を畧説せば佛の教は博物館に遊ぶが
 如く廣大深密に過て人その全體を窺ひ難し耶
 蘇の教は醇然無雜一酒一肴の腹を盈せが如し
 即ち天地を以て教の主本となし信愛を以て能
 所となし所能となし乃ちろの化の人意に
 適し易くして普及する所以なり故に人の神と
 信し佛と念する漠然たるに似たりと雖もろの
 名を存すればろの實從て存するは理の然るべ

とを概見して主公の面目を指摘するが如く靴を隔てゝ痒を搔くの憾を免かれず故に世人をして動もすれば妄信の念を起さしむ孔は主公に面接し親しく言語を交へその賢愚を見たるが如きも惜いかな接對の狀券と登階の路程とを指示せざるものゝ如したゞ佛のみ主公に握手し欣抃笑語主となり伴となり珍膳美肴一として具備せざるなし豈その接對の狀券を握り登階の路程を指示するのみならんや庭園の接置樓殿の構造歴々としてその眞景を顯はさ

るはなしされ余か佛を以て獨出の教主と尊崇する所以なり然れども今日世態の上に就て佛耶の二教を畧説せば佛の教は博物館に遊ぶが如く廣大深密に過て人その全體を窺ひ難し耶蘇の教は醇然無雜一酒一肴の腹を盈むが如し即ち天地を以て教の主本となし信愛を以て能所となし所能となし乃ちろの化の人意に適し易くして普及する所以なり故に人の神と信じ佛と念ずる漠然たるに似たりと雖も予の名を存すればろの實從て存するは理の然るべ

き所なるを以て亦深く責るに足らずたゞその
顯理の一點に至つては聖人復た出るも必ず余
が言を易へざるなり

もし佛耶宣教者の上を評せば耶は實にうの上
首を占めたりと謂はざるを得む試に耶蘇宣教
者の室に入てその言語を交へば瞭然たる佳氣
來て吾が眉目を襲ふの情致あり且その人の如
き勤勉勸誘誠に善く敬愛の道を守てうの教を
翼賛するものと如し佛の宣教者の如き善は則
ち善なりと雖も自ら亞細亞の習氣あるを免が

れずされ一は萬里の海外も遠しとせず傳道の
ためよはその身命をも惜まむ捨財をも念とせ
む人に接するは恰も神に對するが如く赤子を
保んずるが如きの一着よりして斯に至るなり
佛の宣教者の如きその法施あるを知るも財施
を行はず自國に安心固着するも異邦の人を化
するを善くせず人に接する或はその傲慢なら
ざれば勃率に傾き易しされ宗規宗制の下流を
汲んで教主釋迦文の根本を照見せざるが致む
とあるなり

二前島密曰
此段の所
説白人の
手を假て
宗教を一
洗すと黄
人爲し得
ずして白
人これを
なす何ぞ
この理あ
らん均是
人也豈黄
白の別あ
らん而し

然れども此の以後歐米の中に大豪雄生出し佛の正實理を首唱し廣長舌を掀翻せばその説忽ち地を卷て五州に波及すべし何となれば理學よまれ哲學にまれ共にみな佛の正實理を發顯するの機具たらざるはなくろの人や大根大機達して後止むの氣概あるを以てなり余故に耶蘇教の蔓延は佛種を傳播するの好田地なりといひ哲學の極度は佛智を發見せるといふ所以なり然れば今後亞細亞の教は地を拂て耶蘇教と變ずるともされ釋迦文善巧方便を以て人間

て黄種爲
し得ず白
人専らこ
れを爲す
痛むべき
かな

に生出し他方の小乗教を敷演し亞細亞宗教の弊風を一洗し彌勒出世の大道場を全地球に設置して教法維新の大神通を顯現せらるるや
又一步を進めて考思をなせば佛といひ耶といふも皆是れ假名なり天といひ神といふも亦此れ識心所造の名目たるに外ならず假名を破し識心を認めざれば一大事を既に脚跟下に成就して盡大地はされ神なりされ佛なり地を穿て水のあらざるなく海に入て鹽味を感せざるな

きが如し神と信ぞ佛と信ずるはその地位に至
 んための門札なりおれを捨て別天を求め
 神を詮索せば精神冥濛終に出期あるとなし聖
 人あゝを以て人心惟危道心惟微惟精惟一允執
 厥中と曰玉へり或は又盡大地は是れ病なり是
 藥なりと謂へりおの地位を明らめざる故に森
 羅萬象は盡くおれ病根をなして識心ためにそ
 の森羅萬象の奴隸となれり萬物皆備於我と徹
 底し而してその我なるもの消滅せるの境に至
 ればおれ藥病相ひ治せと云ものにて事々物々

おれ神なりおれ佛なり神威佛光法爾として具
 らざるなし譬へば波として水にあらざるなく
 水として波瀾を生ぜざるなきが如し自家に就
 ておれを謂はど花を拈するもおれ神事なり吾
 か手を啓き吾か足を伸ぶるもおれ佛事なり佛
 豈邇きにあらざらんや神豈遠きに求めんや
 若し人今後余がおの論よよつて眞理の火の如
 きを發見し事務の外に宗教なく宗教を離れて
 事務なき意義を了解せば佛耶の理合は自ら會
 心せるのみならず神徳の廣大なる佛智の無量

なるをも知り得べし。されを萬古の心胸を開拓
すと謂ひされを萬物主宰の人と謂ふなり。され
余が天神地祇に報むるの寸心を満足するのみ
ならず。疵瑕を論じ辨難を試むる罪禍は地を拂
て消滅するに至るべし。

救世百年眼完

萬物皆備於我。通篇所悟入。全
在茲。余嘗有詩曰。萬物備于我。
内省可反觀。心裡乾坤大。胸中
風月寬。又曰。妙理在眼前。通言
皆可察。誰不具一分。賢聖佛善
薩。附書請教。

中村正直

世之論佛耶二教。有咫尺眼者。有頃刻眼者。摸說喋々。殆類漆
筭。有百年眼。方足以見佛耶之
全象歟。否。非具無量億劫眼。則
真能究竟其本末始終乎。

默雷妄批

佐藤麟角著救世百年眼。論釋耶二教。
旨趣精確。不倭乎古。不阿於今。蓋得其
中正者也。余少壯專志武技。刻苦數年。
未遑學文。而纔悟歸一之理。群疑漸盡。
然至施諸事業。則往往齟齬。宜乎非知
之難行之惟難也。自非知行合一能達
圓融無礙之境者。寧足補造化之功乎
哉。余閱此篇有所感。因錄數語以最焉。

涯舟居士

自跋
 或曰。子所說之法。謂之佛乎。謂之耶乎。
 將謂之儒乎。曰。余所說之教。取三聖之
 骨髓。而不假其皮肉者也。謂佛謂耶謂
 儒。無不可者。謂非佛非耶非儒。無不可
 者。謂亦佛亦耶亦儒。無不可者。吾無所
 取乎名相焉。

佐藤麟角

明治二十一年八月廿五日出版
 明治二十一年九月廿五日出版

正價金貳拾錢

著作者 東京府平民 佐藤麟角

發行所 山口縣平民 本提山

印刷人 東京府平民 京橋區木挽町十丁目一番地

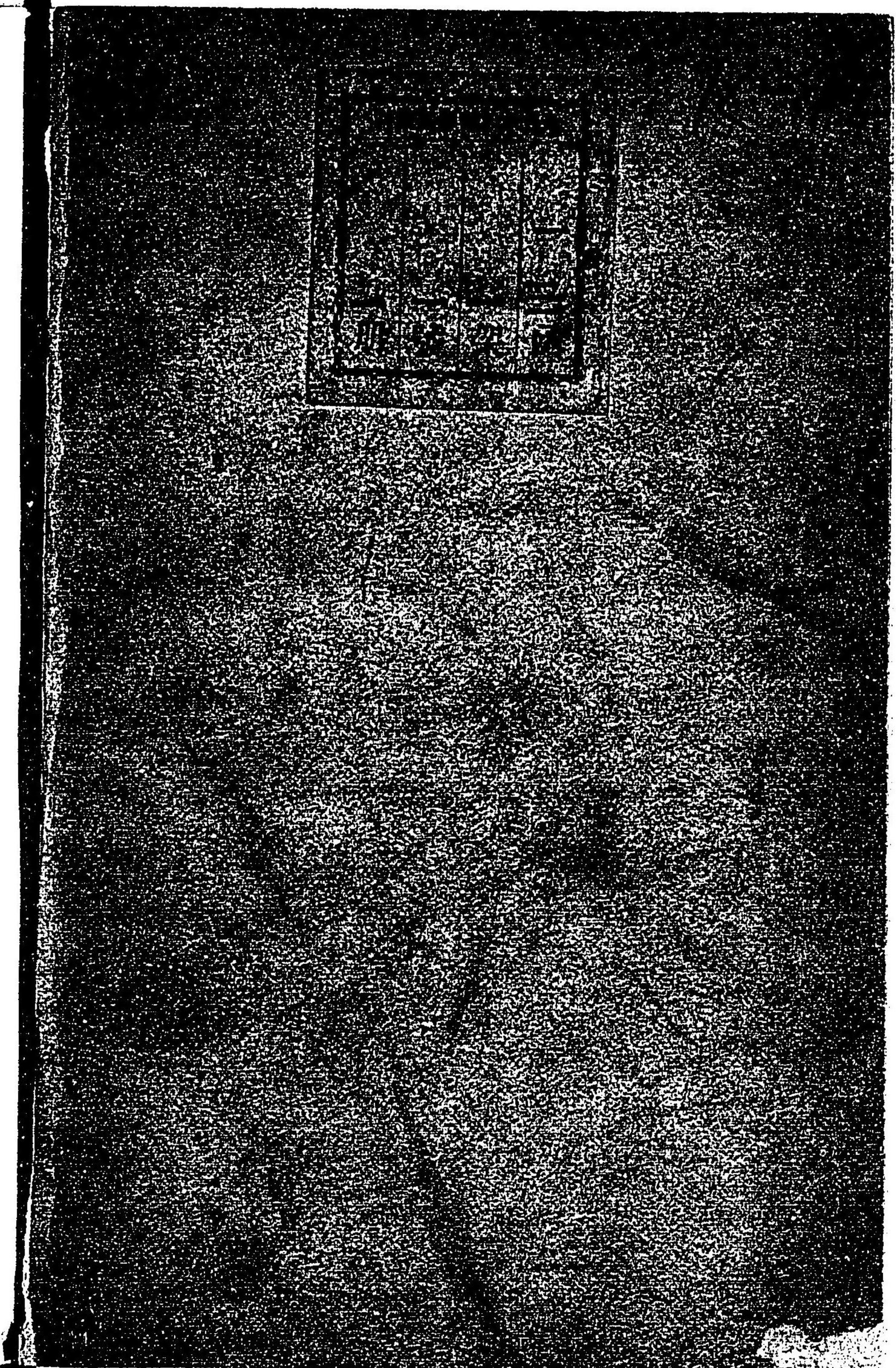
印刷所 京橋區八官町十八地

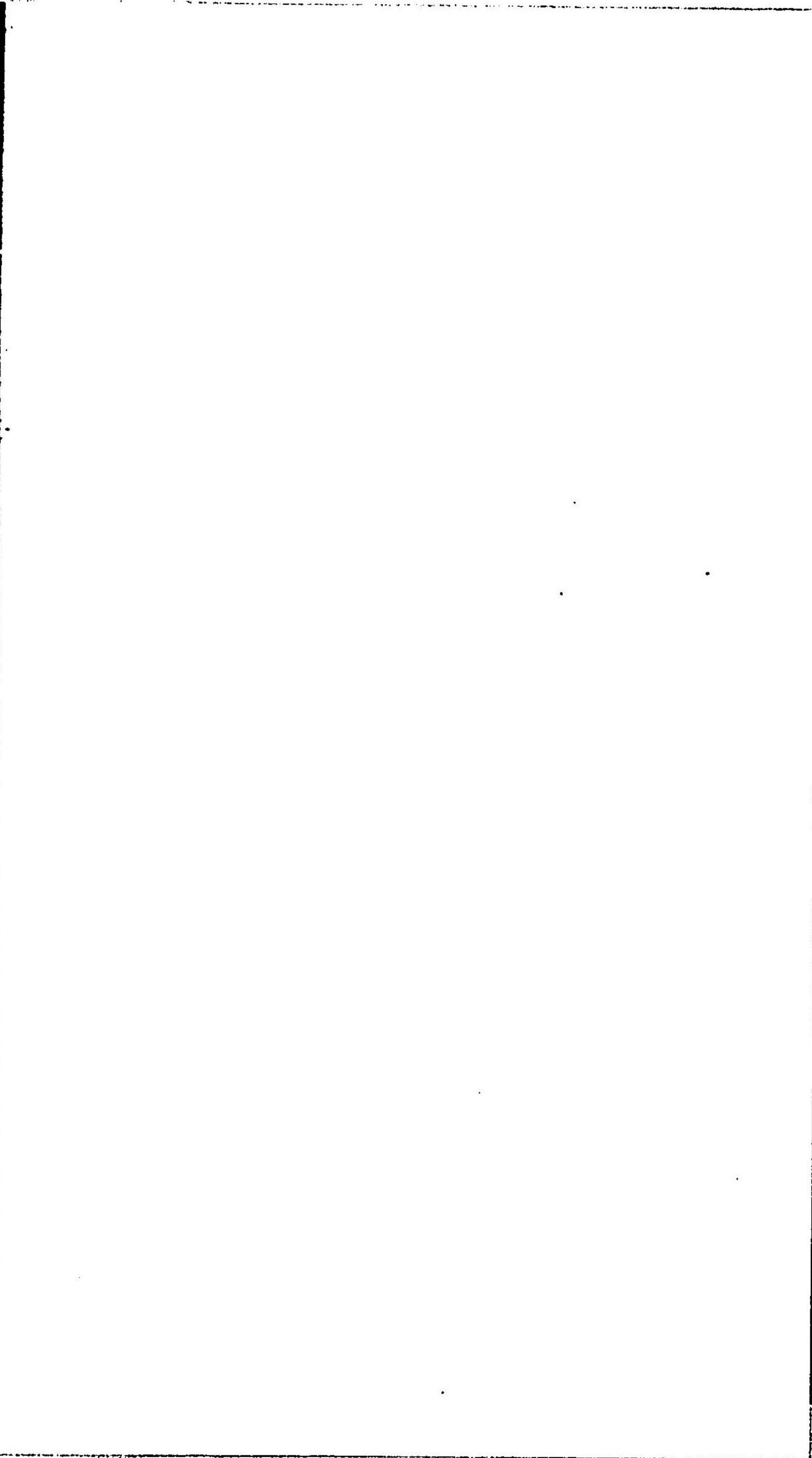
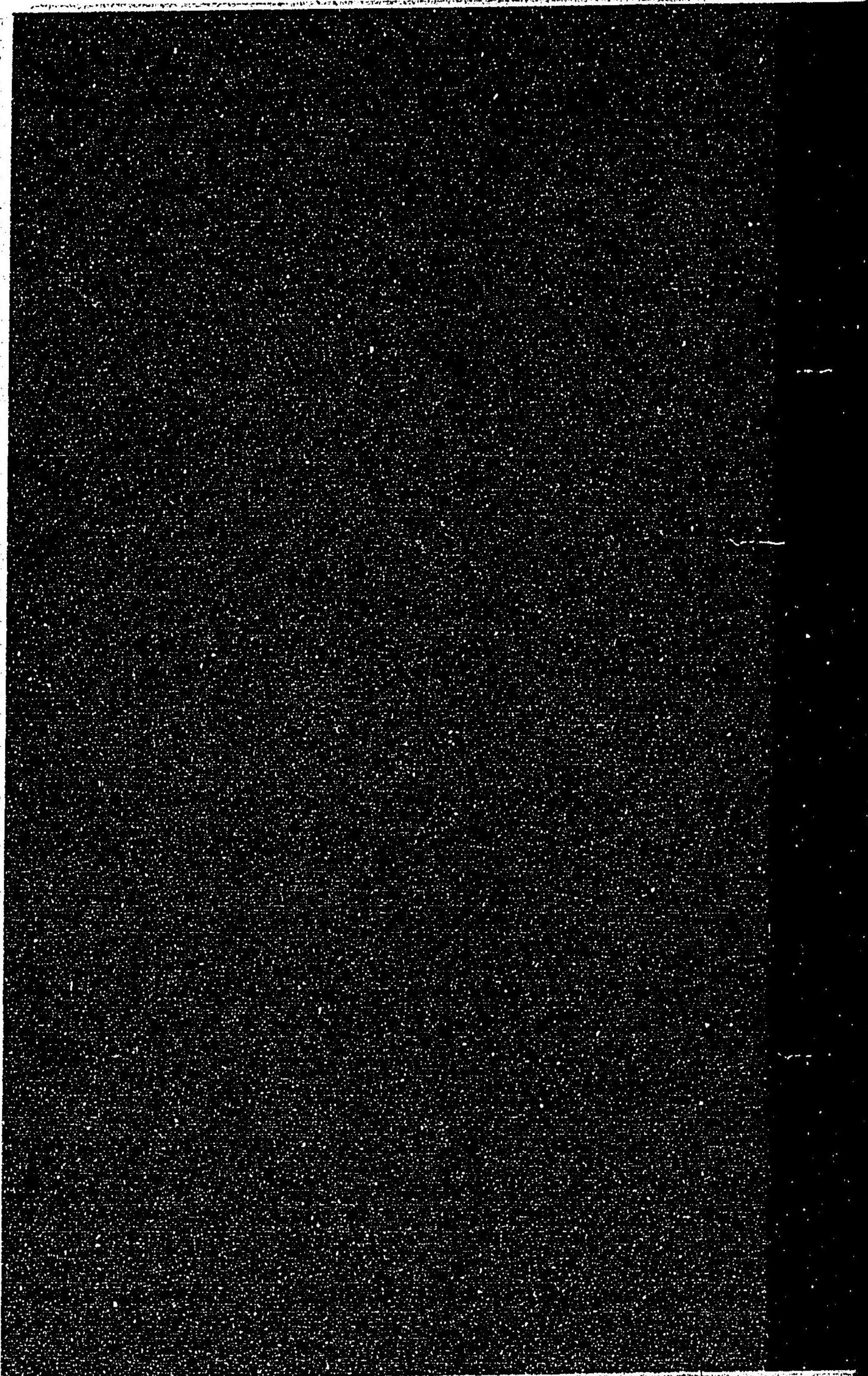
發行所 京橋區宗十郎町十五番地

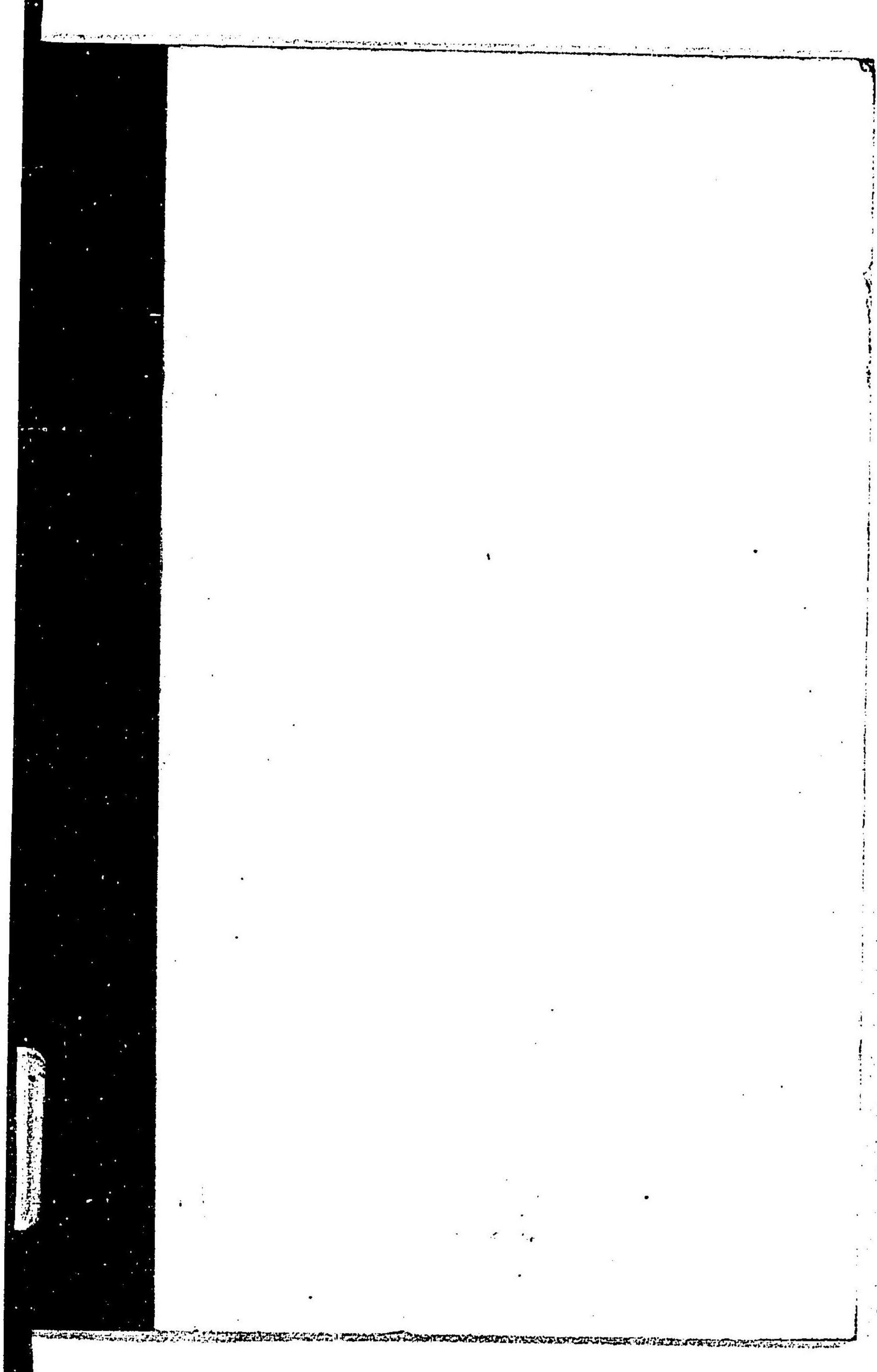
芝白金臺町一丁目十一番地

大賣 東京麻布日夕窪町
 東京三拾間堀町一丁目
 東京麻布飯倉五丁目

鴻明 森江 社社
 盟教 佐七







救世百年眼

佐藤麟角

国立国会図書館

013566-000-9

特49-827

救世百年眼

佐藤 麟角 / 著

M21

ABA-0033



